

## 日高先生、丸山先生、荒牧先生の退職に際して

法学部長 金子 大

日高昭夫先生、丸山正次先生、および荒牧重人先生が、2023年3月をもって定年退職をされた。ただし精確には、当該3人の先生方の中には、定年の年齢に到達後も特任教員としてその職務に当られていた人も含まれており、厳密な意味での定年退職とはいえない。確実なことは、3人とも同時期に大学を去られたということであり、当学部において少なくとも筆者にとっては、未だそのことによって空虚になってしまった印象を拭き切れずにいる。

換言すれば、3人の先生方の存在感、本学在職時における学内外での活躍、3人の先生方それぞれの偉勲等が至大であることを意味する。仔細は本号におけるそれぞれの先生方の経歴記載の部分に譲るが、学外における活躍はいうまでもなく、学生への教育を含めた学内業務の取扱いおよび執行については、3人とも瞠目するものがあったように思う。あくまでも筆者の印象だが、その結果として、日高先生に関しては、具体的な課題解決能力を具えた多くの公務員合格者の輩出、丸山先生に関しては、現在クローズアップされる観念を使えばSDGsを十分に勘案した大学の適正な運営、荒牧先生に関しては、本学法科大学院設置時における、本学法学部出身者をも含めた司法試験合格者の多数を輩出した法科大学院運営、こうした点に3人の先生方の業績が収斂されるように思料する。また、上記のそれぞれの業績のお蔭により、1990年代以降本学が熾烈な大学間競争の波濤の中で今日生残ることができたということもできよう。

日高先生および丸山先生に関しては、本学法学部政治行政学科への言及

を欠くわけにはいかない。ご両所は在職期間中のほぼ全てにつき、1991年に開設された政治行政学科（2001年までは行政学科）に所属していた。そして奇しくも2023年3月の同学科の閉止と同時に退職されたというものである。筆者は一貫してもう1つの学科である法学科の所属であったが、教員として外から見ていた政治行政学科の印象は法学科とは明らかに異なり、いい意味で一種の「職人集団」のようなものであった。その学科のまさに徴表ともいえる人物が、日高先生および丸山先生であったように思う。1990年代着任間もなく「若い」筆者は、両先生を仕事のできる「大人」として、それぞれロールモデルと考えていた記憶もある。

何れにしても、3人の退職されたあと残された者が空空漠漠たる日々を送るわけにはいかない。われわれとしては、3人の先生方の築かれたものを銘記し、そして引継ぐべきものは引継ぎ、そして次代へと繋がなければならない。

日高先生、丸山先生、荒牧先生には、これまでのご活躍に対して最大の謝意を表するとともに、今後ますますのご健勝を祈ってやまない。